

いかに生きるべきか



大谷 実
総長

皆様、ご卒業、誠におめでとうございます。それぞれの課程を無事終了し、心からお祝い申しあげます。また、教職員の皆様の多年にわたるご指導に敬意を表し、感謝いたします。

学校は、日常生活及び社会生活に必要な知識と教養を身につけることを目的とするものですが、教育基本法によりますと、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と奉仕を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」（二条）とされています。卒業される皆さん、とくに、これから社会に出られる大学及び大学院の卒業生・修了者の皆さん、この教育基本法教育目的に照らして、各自の達成度

は、いかがでしょうか。特に、個人の価値を尊重し勤労と奉仕に努める心構え、さらに自主的精神を自分のものにされたでしょうか。

一方、同志社の校祖新島は、「教育の目的は、独自一己の見識を備え、仰いで天に愧ず、伏して地に愧ず、自ら自己の手腕を勞して、自己の運命を作為するがとき人物を教養する」ことにあると宣言し、「知識あり品行あり、自ら立ち、自ら治むる人民」、「一国の良心と謂うべき人々を養成する」ためには、キリスト教主義を措いてほかにないとして同志社を創設しました。この同志社設立の趣旨は、今日の同志社の教育理念でもあるのですが、天にも地にも恥じない生き方、そして、キリスト教主義のモラルは、皆さんの人生行路の基本として根付いたでしょうか。

学校は、前にも記したように、法律のうえでも、また、同志社の教育理念としても、単に知識や教養を身につけるだけでなく、最終的には人間としての生き方を学ぶためにあるのですから、ご卒業に当たって、今まで、人間としての生き方についてどの程度まで学ぶことができたか、そして、これからの皆さんの人生行路をいかに歩むべきかについて、改めて思いをめぐらせていただきたいのであります。

私は、一九五〇年に高等学校に入学し、一九五七年に大学を卒業したのでありますが、今振り返ってみますと、その当時の高校生や大学生の間では、「人間、いかに生きるべきか」について、真剣に考える人が多かったように思います。戦後の価値観の急激な変化や不安定な経済・社会情勢を反映したためともいえますが、青少年は、それぞれ自分の人生行路に、確固としたものを求めて、青春時代を苦悩していたように思うのであります。

その後の高度経済成長に伴って、人々の生活は豊かになり、何でも簡単に手に入るようになってからは、青少年の皆さんに物質的な豊かさを求める意欲はあっても、それが人生行路にとってどのような意味を持

つか、物質文明の豊かさは本来に人を幸福にするのかといった人生問題への関心は、急速に衰えてきたように思います。一九七〇年代以降は、学生諸君から人生の悩みについての質問を受けることも、非常に少なくなつてまいりました。今年卒業されて社会に出られる皆さんも、おそらくこのような時代の流れに即した学生生活を送つてこられたことと想像します。

しかし、ここ数年間、社会や人々の「人間の生き方」についての関心が少しずつ変化してきているように思います。その背景については、環境問題といった物質文明主義の弊害、豊かさを求めた時代に対する反省もありますが、情報化、国際化及び高齢化によつて社会の変動が顕著となり、将来が不安定かつ不透明な時代になつてきたこと、そして、何よりも日本の経済が長期にわたつて低迷し、特に構造改革の国民生活に与へつつある深刻な影響が人々を不安にさせているといった点が考えられます。

その背景がいずれにあるにしても、ここに来て、日本人としての生き方に社会の関心が向かいつつあることは、歓迎すべきであります。「この国の在り方」を問い、「日本人のこころ」をたずね、「世間体」を重んずる日本人の生き方に反省を迫るといった「生き方」論は、それぞれ傾聴に値しますし、「自己決定」と「自己責任」を社会改革の根底に置こうとする近年の国の政策も、理解できないわけではありません。

しかし、この国の在り方を問題とする前に、私たち一人一人が、何を終生の目的として生きるべきかを問うべきでありますし、世間体を意識して建て前と本音を分ける生き方を改めるべき理由を明らかにすべきであります。また、物事は自分で主体的に決定すべきであり、その結果は「自ら責任を負え」という自己責任の考え方は、倫理としては分かりますし、そのような生き方を求めるべきであります。それを終生の目的として生きるというわけにはまいりません。つまり、近年主張されている人生論は、一人一人が何を人生の目的として生きるべきかという人生論の核心に答えていないと思うのです。

人間の「生き方」を問題とする場合、在るべき社会や日本人のこころを問うのではなく、一人の人間として、本当に幸せになるためには、どういう生き方をすべきかが最も重要だと思えます。「古来、生きとし生ける者は、すべて幸福を求めて生きる」といわれているように、幸福の追求こそ人間本来の欲求であり、何故人間にとって本当の幸福であるかに答えることが、人生論の核心でなければならぬと考えるからであります。別な言い方をすれば、人生の目的は幸福であり、常に至福の気持ちで平安に暮らし、人生を全うすることであると考えるのであります。幸福は、「山の彼方の空遠く」に在るのではなく、ある学者が言っているように、「幸福は、あらゆる学問、努力、あらゆる国家的施設の究極の基礎」なのであります。

問題は、何をもつて幸福と考えるかであります。その幸福は、いかなる不運や災難にあつても、また、人生の最後においても揺るぎないものでなければなりません。それだけに答は簡単ではなく、また様々であります。そして、私たち日本人は、個人主義の定着が遅れたこともあつて、この問題を自らに突きつけて正面から考えるということをしてこなかった、そして、今もそのような傾向があるように思えます。しかし、この問題を真剣に考えない限り個人としての生き方が定まらないはずでありますから、せつかく克ち取った個人の尊重や尊厳の原理は、無意味になつてしまうように思うのです。その意味で、まず、自分にとって揺るぎない幸福とは何かを問い、それを人生の目的として、これからの人生を邁進していただきたいのであります。

CHANGE is CHANCE

八田 英二
大学長



今春、同志社大学から晴れて学士の学位をお受けになる学部卒業生の皆様、また修士ならびに博士の学位を授与される大学院修了生の皆様に、同志社大学長として心からお祝い申し上げます。皆様が大きな希望を胸に、晴れて同志社大学あるいは大学院に入学されて幾年月かが経過しました。「光陰矢の如し」と申しますが、この間の皆様の勉学努力、研究努力が学位記となつて実を結びました。学位記に刻まれた皆様の名前は同志社大学での真摯な学業生活の証となるものです。それぞれの専門分野で真理を追究してこられた皆様に深く敬意を表したいと思います。また、この間、皆様を温かく支え、見守つてこられたご家族をはじめ関係者の方々に衷心よりお祝い申し上げます。

皆様が学ばれた同志社大学は、同志社英学校から数えますと本年で創立百二十七年を迎えます。現在、わが国には六百七十校余りの大学が教育活動を展開していますが、「良心ノ全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来タルン事ヲ」という、良心碑に刻まれた新島襄先生の溢れんばかりの情熱を原点として、同志社大学はわが国屈

指の私立大学として教育事業を展開してまいりました。自治自立の人民の育成という建学の精神を高く掲げ、キリスト教主義、自由主義、国際主義の教育理念のもと、優秀な教授陣、素晴らしい教育研究環境を提供し、教育事業の展開を通して社会に貢献することが同志社大学の社会的使命であり、これまでに、その教育成果の結晶ともいべき数十万人の有為な卒業生が大学を巣立ち、実社会のさまざまな分野で活躍されております。

同志社英学校の創立は一八七五年、時代は明治維新後の近代社会形成の揺籃期でした。ご承知のように、明治政府の基礎造りに大きく貢献した人物は、現在から考えると驚くほど若く、例えば明治維新当時、勝海舟は四十六歳、西郷隆盛四十二歳、木戸孝允三十六歳、板垣退助三十二歳、大隈重信三十一歳と記録されています。近代日本の誕生という大事業は、大志を胸に、夢を語り、社会に新たな息吹を吹き込む、創造力溢れる青年を原動力としたといっても過言ではありません。

同志社の校祖新島襄先生が函館を離れ、上海を経て、一路米国を目指されたのは一八六四年七月、先生が二十一歳の夏のことでした。アメリカでの十年間、勉学に勤しまれ、また多くの出会いを経験されたのち、先生は一八七四年に帰国されました。教育事業による人材育成により、近代社会の建設に寄与すべく、翌一八七五年一月に同志社英学校を京都に設立されたのです。先生三十二歳のときでした。

新島先生が大志を抱き、日本を脱国されたのは、ちょうど皆様と同じ位の年齢だということがお分かりでしょう。二十一世紀を迎え、時代は混沌としています。過去十年は失われた十年と呼ばれているほどです。わが国経済社会は長期停滞に迷い込み、一筋の光を求めて暗中模索の状態です。過去のパラダイムが色褪せるなか、さまざまな分野で新たなパラダイムの確立が求められています。政治、経済、社会全てで改革が求められる夜明け前の閉塞的な状況で、必要とされるのは強い信念をもった創造力溢れる人物です。

このような時代こそが、私学同志社が育成を目指す自治自立の人物が存分に活躍できる好機なのです。変化の時代にこそ好機が訪れることは長い人類の歴史が幾度となく証明してきたところです。

CHANGE IS CHANGE.

と申しますが、CHANGE と CHANCE という語をよく見てください。二つの単語では、G と C が入れ替わっているだけです。CHANGE の C に T という形の Y コ棒とタテ棒を加えると CHANGE となります。Y コ棒を間口や総合化と、タテ棒を奥行きや専門性と考えてください。CHANGE から CHANCE への転換は、まさしく時期を見定め、いままでに培われた豊富な専門能力に基づいて、幅広い視野に立った上で総合的な判断を下すことにより可能となります。同志社大学で身に付けられた豊かな人間性を基礎に、専門化と総合化によって大きな時代の波を乗り切り、輝くような未来を切り開いてください。

今春、船出をされる皆様にとつて誇るべき宝は、同志社大学で培われた自治自立の精神です。加えて皆様は、豊かな創造力と溢れるような情熱を胸に秘めておられます。「初心忘るべからず」と申しますが、若者の特権ともいうべき失敗を恐れず、いつまでも止むことのない挑戦心、ファイティング・スピリッツをいつも高く掲げてください。仕事に打ち込んでいる人、目標に向かっていている人は、いつまでも生き生きとして充実した人生を送ることができるからです。

人生のひとつの節目ともいうべき卒業にあたり、同志社大学を後にして社会に巣立っていかれる皆様に、アメリカのサミエル・ウールマンの「青春」という詩の一節を贈りたいと思います。

青春とは、人生のある時期をいうのではなく、心の状態をいう。すぐれた創造力、逞しき意志、燃ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易をふりすてる冒険心、こういう心の状態を青春という。

年を重ねただけでは人が老ゆることはない。理想を失う時にはじめて老いが訪れる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。苦悩や疑い、不安、恐怖、失望、こういうものこそ、あたかも長年月の如く、人を老いさせ、精気ある魂を芥に帰せしめてしまう。

人は信念とともに若く、疑惑とともに老ゆる。人は自信とともに若く、恐怖とともに老ゆる。希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美、喜び、勇気、壮大、力の靈感を受ける限り、人の若さは失われな

い。

学部卒業生ならびに大学院修了生の一人ひとりの行く末に大いなる期待を寄せて、卒業生に贈る言葉といたします。

苦き水を甘くする木の如く

卒業生に
贈る
言葉



森田潤司
女子大学長

ご卒業おめでとうございます。

同志社女子大学での学生生活、大学院での研究生生活を終えて次への飛躍の時を迎られた皆さまに心からお慶び申し上げます。

そして、これまで、見守り支えてこられたご家族の皆さまに対しても心からお祝いを申し上げます。今日この日の成長ぶりをご覧になられて感慨ひとしおではないかと拝察いたします。また、これまで何かと本学にご理解とご協力を賜りまして、まことにありがとうございました。

卒業生の皆さんは、今まさに大学生活、大学院生活を終えようとする感慨と、新たな生活への決意で、

心の高ぶりを禁じえないことと思いますが、私も、皆さんを実社会に送り出すにあたり、はたしてしつかりやってくれるだろうかという心配と、いや大丈夫だという期待とが交錯しています。

一八八九年に校祖新島襄先生は最後に出席した同志社英学校の卒業式で旧約聖書（出エジプト記一五章二二―二五節）にある言葉を引用して次のように述べて卒業生を送り出されました。「今諸君を社会に送り出すのは、これあたかも、メラの苦き水に投ずるようなものである。予としては心中まことに忍びざるものがあるが、さりとて諸君よ、予は敢えて之を望まざるを得ない。願はくば諸君はメラの苦き水を甘くする木の如く、諸君もよろしくこの苦き社会を甘くする力をもたれんことを切望してやまない」（新島襄片鱗集）。

旧約聖書によると、三千五百年前に、モーセはエジプトで奴隷となっていたイスラエルの民二百万人を率いて、エジプトを脱出しました。イスラエルの民は、紅海を渡り、シユルの荒野をシナイ半島へと下っていきました。三日間水がなかったそうです。そして、マラに到着しました。そこには泉がありませんが、塩分と硫黄の成分が混じっていて、とても飲める水ではありませんでした。こういうわけで、その名はマラ（苦い）と呼ばれました。民はモーセに向かって、「何を飲んだらよいのか」と不平を言ったそうです。モーセが主に向かって叫ぶと、主は彼に一本の木を示されました。モーセがその木を水に投げ込むと、水は甘くなったのです。そのような木があるのかどうか存じませんが、何らかの方法で塩分を含む苦い水を脱塩し、飲み水とすることができたのでしょうか。

新島襄先生は卒業生にマラ（メラ）の苦い水を甘くする木のように、この苦い社会を甘くする、つまり、よりよき社会に変える人物となるように希望されました。単に技術や才能を持つだけでなく、良心を手腕にして運用できる人物が社会の変革に必要だと考えておられた先生の卒業生に対する信頼と期待です。時

代は変わり、社会の状況も変わりましたが、今また、混沌として先行きの見えない時代となりました。新島襄先生が卒業生に対して寄せた信頼と期待は、いま皆さんを送り出す私たち教職員の気持ちでもあります。

新島先生はまた、「大学は大きな魚も小さな魚もいる深山の池であり、そこで伸びやかに育った大きな魚も小さな魚もその分に応じて一身を世のために犠牲にし、この美しい日本を改良して欲しい」と祈られました。これは無理をして社会のために犠牲になれとおっしゃっているのではないと思います。その分に応じて自分を磨き、輝いて生きるように努力することを望まれたと思います。皆さんが伸びやかに、輝いて生きること、それが周囲の人々ひいては世界の人々を輝かすことに繋がることでしょう。苦き社会を変える力となるでしょう。その分に応じて、しかし、精一杯という点が大切です。国は、男女共同参画社会の実現に向けて男女の意識改革と実践を強力に推進するとしていますが、社会はまだまだ対応できていません。女性がすばらしい才能を持ち、意欲を持つて仕事、学問、芸術に打ち込もうとするとき、まだまださまざまな障壁があるでしょう。結婚生活、出産、子育ても並立させようとすると、さらに厳しいことが予想されます。結婚すれば退職が当然という雰囲気のある会社もあります。夫に理解があればというの一般論でしかありません。平凡な言い方ですが、あらゆる未知なる要素のなかで自分の人生を設計しておかねばなりません。危険を予知し準備をしておかねばなりません。不安をおおるようなことを申しましたが、大丈夫です。皆さんはまだ気づいておられないかも知れませんが、実力・能力は身につけています。事に臨んでの解決方法のヒントはこれまでの同志社女子大学での学びや生活の中にきつとあります。マラの木も生えていたときにその能力を使っていたわけではありません。苦き水に投げ込まれて初めて苦き水を甘き水に変える働きをしたわけです。自信をもつて臨んでください。

人は自立して生きることが求められますが、一方で助け合い支え合っていかなければ生きていけない生き物

でもあります。しかし、現実には、人々は物理的にも精神的にも分断され、孤立化する傾向が進んでいます。一人で寂しく悩む一方で、さまざまな関わりを干渉と受け止め、心を閉じる傾向もあります。家族、近所、地域といった社会集団が崩壊しつつあり、それに変わる受け皿がないからでしょう。先進国や都会で殊にその傾向が強くなっているのは皮肉なことです。それでも誰かに支えられています。心を開くことで誰かが助けてくれます。卒業生の皆さんは、ご両親はじめ多くの人々の協力と支援によって今日の日があることをあらためて心に刻み、このことを感謝し、今後も感謝の気持ちを持って活動していただきたいと思っています。この広い地球上には、さまざまな人々がおり、その中には災害や戦禍に巻き込まれたり、貧困や飢えに苦しんだりしている人々も大勢いることを忘れないでいただきたいと思っています。お世話になった人々への感謝の気持ちを持ち続けることは、どのように生きるかとも関係する大切なことでしょう。各自自信を持って生きるとともに、声を掛け合い、悩みを分かち合って生きる必要があります。

私たちの大学のエンブレムには栄光館の建物とぶどうの枝と豊かに実をつけた房が描かれ、「EGO SUM VITIS VERA」というラテン語が書かれています。これは「私はまことのぶどうの木」(ヨハネによる福音書一五章一節)というイエスの言葉ですが、キリスト教主義を建学の理念とする同志社女子大学に連なる私たちそれぞれがぶどうの枝であり、ぶどうの実であり、母校での真理への学びを通して、イエス・キリストと神へ連なるものであることを示す言葉です。カレッジソングにも同じ意味の歌詞がありますね。卒業生の皆さんが、世界のどの地にあっても、また、どんな境遇にあっても、母校同志社女子大学と同志社の枝にひとつにつながっています。そして、イエス・キリストと神ともまたつながっています。このことを信じて、勇氣と自信をもって活動していただきたいと思っています。

皆さま一人一人の将来に期待を寄せるとともに、健康と幸福を祈ります。